

20 繰り返す膀胱炎様の症状に対して 漢方薬が奏効した間欠自己導尿施行 患者の一例

札幌医科大学¹⁾、留萌市立病院 泌尿器科²⁾

田中 俊明^{1) 2)}、京田 有樹^{1) 2)}

症例は30代女性。15年前に多発性硬化症と診断され、7年前より下部尿路機能障害を発症した。頻尿および切迫性尿失禁に対し、ムスカリン受容体拮抗薬、 β 3受容体作動薬を使用した上で、1日4-6回の間欠自己導尿をおこなっていた。導尿時の尿道痛、頻尿の増悪の訴えがしばしばあり、「膀胱炎」として頻繁に抗菌薬の処方を受けていた。前医への冬期間の通院が困難とのことで、地元である留萌市立病院泌尿器科(札幌医科大学からの週1回の外来出張のみ)に紹介となった。

蓄尿症状の改善を目的に、札幌医科大学附属病院にてボツリヌス毒素膀胱壁内注入療法を施行された。3か月間は頻尿の改善が若干みられたものの、その後再燃した。この治療経過中も導尿時の尿道痛、頻尿の増悪は断続的に自覚しており、再度抗菌薬処方の希望があった。抗菌薬投与後の症状について問診すると、毎回「抗菌薬の服用直後に症状が改善する」とのことだった。

望診所見：中肉中背、活力あり、食欲良好、多弁。独自の解釈で、自説を述べる。

尿沈渣所見：白血球30-49/hpf、赤血球0-1/hpf症状の経過から、尿道痛、頻尿は細菌性膀胱炎による症状ではないものと考えられ、黄連解毒湯2包+猪苓湯2包 分2を処方した。開始2か月後の受診時には、「頻尿は落ち着いている。抗菌薬は要らない。」と話された。開始から6か月後には、「最近“膀胱炎の症状”はない。言われてみれば漢方薬を飲んでから調子がいいようだ。」と話された。漢方薬の処方以前は2か月ごとに抗菌薬が処方されていたが、漢方薬開始以降は12か月間抗菌薬を服用せず経過している。間欠導尿施行患者では膿尿の出現は不可避である。排尿時痛、頻尿などの症状がある場合は細菌性膀胱炎を否定できず、抗菌薬を投与する傾向にあり、しばしば患者側も要求することがある。一方、漫然とした抗菌薬の使用は薬剤耐性を誘導する懸念があり、好ましくない。しかしながら、時間が限られる外来診療の中では安易な薬剤処方に頼りがちとなる。

本症例では、細菌性膀胱炎の経過としては奇異に感じられたことから、抗菌薬に代わり、漢方薬の使用を考慮した。症状から竜胆瀉肝湯が妥当と考えたものの、同院に採用がなく、代替処方として(第39回泌尿器科漢方研究会で発表)黄連解毒湯+猪苓湯の処方とした。結果的に患者の満足が得られただけでなく、抗菌薬の使用も回避することができ、抗菌薬使用の適正化にも貢献できたものと考えられた。漢方薬は抗菌薬の頻用、乱用の防止にも有用である可能性が示唆された。